タイにおける国王のイメージ形成とダムロン親王

――「親愛大王」を手がかりとして――

平成 18 年度入学
派遣先国：タイ
日向　伸介

キーワード：王権，タイ，ダムロン親王，ラーマ五世王，親愛大王（Piya Maharat），ラーマ九世王

対象とする問題の概要

1932 年の立憲革命で絶対王政が廃止されて以来，今日までタイの王権は日本の天皇制と同様，法制度によって制限されてきた。しかしながら，太平洋戦争前後の一時期を除き，タイ国王の政治的，経済的，社会的なプレゼンスは戦後日本のそれとは比べものにならないほど強い。例えば昨年 2006 年 9 月の軍事クーデターは，国王の権威と権力，国民からの支持を改めて認識させる事件であった。

この強力な王権を体現する現国王ラーマ九世王は，同じく「大王」の称号を持つ祖父，ラーマ五世王との類比とともにその偉大さが語られることが多い。そしてほぼ一世紀前，今日のタイ国民から最も敬愛される五世王のイメージ形成に大きく寄与したのが，本研究の注目する王の異母弟ダムロン親王である。彼は五世王に「親愛大王」という異名を与え，国民のために尽くした国王という認識の普及に努めた。今日まで，彼の王権思想がタイ社会に与える影響は計り知れない。

ダムロン親王像
（ウォーラディット宮殿内）

研究目的

本研究の目的は二つある。第一に，ダムロン親王がタイ社会における国王をどのように定位したのかを明らかにすることである。ダムロン親王に関するこれまでの研究は，主に行政改革と歴史叙述の分野で行なわれてきたが，本研究は「王権」をキーワードに，彼の思想を再考する。

第二に，彼の創出したラーマ五世王のイメージと現国王をめぐる言説を比較し，相対化することである。具体的には「親愛大王（Piya Maharat）」という概念をとりあげる。これはダムロン親王の考案した造語で，「国民の愛する国王」を意味する。それまで神聖な存在であった国王は，まさに現国王がそうであるように，「国民の」国王と定義されることになった。

このように，国王と国民とは表裏一体である。今日のラーマ九世王の権威はその国民の支持なくしてはありえないので，王権を歴史的に考察するということは，不可避的に現代的な問題を多く孕むことになるのだ。

フィールドワークから得られた知見について

本研究は文献を中心に行なうので，フィールドワークは主に図書館や一般書店での資料収集となった。チュラロンコーン大学やタンマサート大学といったバンコクの主要大学や国立図書館を利用した。今回初めて現地で文献調査を行なったが，タイでは書籍が再版されることが少ないので，多くは図書館内での複写に頼ることとなった。また，古い資料だと複写も禁止されていることがよくあるので，デジタルカメラが意外なほど活躍した。

ラーマ五世王騎馬像

博士予備論文の段階で必要となるダムロン親王の著作と研究書は十分に集めることができたので，主要な目的は達成されたといえる。しかし，ラーマ九世王に関係する書籍は量が非常に多い上に，その大半は盲目的に国王を賛美するにとどまるものであったので，体系的な資料収集が出来たとは言いがたい。

また，今回のフィールドワークの必須事項であった指導教官による臨地教育は非常に有益であった。私は副指導教官である小泉順子先生から，タマサート大学図書館において，論文のテーマ決定から文献の検索方法など基本的かつ多岐にわたり丁寧なご指導を頂いた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

文献調査以外では，親愛大王，すなわちラーマ五世王騎馬像を見学に行ったので簡単に記しておく。ラーマ五世王の崩御された 10 月 23 日は 1910 年以降国民の祝日として，騎馬像前のみならずタイ全国の官庁で式典が行なわれる。ところが 10 月 23 日に限らず，五世王の誕生日である毎週火曜日には，入れ替り立ち替り数十人という人々が夕方から深夜にかけて参拝に訪れるのである。この参拝の存在は以前から文献を通して認識していたが，騎馬像が祝日とは関係なしに，日常的に信仰を集める姿を実際に目の当たりにして，本では知りえない細かな点も観察することができた。

今後の展開・反省点

今後数ヶ月は，持ち帰った資料と知見をもとに 2007 年度提出の博士予備論文を執筆する。その後の博士論文では，ダムロン親王の手による大量の文書，特に彼から同時代の知識人への書簡なども大量に所蔵する公文書館の一次資料も駆使して研究を進めたい。今回のフィールドワークでは，期間が限られていたことと自分の明らかな能力・経験不足により，公文書館での調査を行なうことは出来なかった。しかし，滞在中に数回当館を訪れ，利用手続きや資料検索の方法など把握することができた。この点は次回の長期調査において大いに活用できるだろう。

小泉順子先生（右）による
タマサート大学図書館内での臨地指導